地は銀鼠にたそがるる 街路の灯はなやかにといりともし 春るさめ に に濡るアカシヤ花は

心にめざむ爽かの 灑み充てる力かな

寂かに歩む若人が

几

猟虎の骨に 鷗飛ぶ 夏の入陽に砂丘のなっいりひいますのなっ

名残の光身にあびてなどり ひかりみ 碧薄れゆく空にうく 異郷の方を思ふかないきょう かた おも 融けざる銀の山脈は

> 紫紺の闇に解けて行く 焚火を囲み歌ふ寮歌たきび かこ うた うた 今宵は淡き夢見んと 谷また谷を辿り行きたに 落葉ふむ音寂 仄青白き白樺や ほのあおじろ しらかば くも

灯漂ふアイヌ小屋 雪の野限は靄こめてゆきのずゑもや 石狩の河波光る 青き空透き銀の月 の酒を汲み交し

王者の誇偲ぶかな